

## ビタミンK欠乏性新生児・乳児出血症予防に 対する母子へのビタミンK投与の実態調査

(分担研究： 新生児・乳児のビタミンK欠乏性出血症の予防に関する研究)

松山 栄吉\*

### 要 約

新生児・乳児ビタミンK欠乏性出血症の予防のための、妊産婦または新生児・乳児に対するビタミンKの予防的投与の実態を知るために、日本母性保護医協会の定点モニターシステムを利用して、昭和62年12月アンケートによる調査を行った。分娩を取り扱う公的病院、私的病院、診療所、それぞれ204、193、397計794施設のうち、予防的投与を行わない施設それぞれ31、38、141計210施設(26.4%)、へパプラスチンテスト実施の結果により投与を行っている施設それぞれ19、5、11計35施設(4.4%)、原則として前例に投与を行っている施設それぞれ154、150、245計549施設(69.1%)で、全体の584施設(73.6%)が投与に積極的姿勢を示していた。

見出し語： ビタミンK欠乏性新生児・乳児出血症、新生児メレナ、ケイツーシロップ

### 研 究 方 法

日本母性保護医協会の定点モニターシステムを利用し、本症に対するビタミンKの予防的投与を行っているか否かについて、公的病院、私的病院、診療所それぞれ234、236、504計974施設にアンケートを発送した。

投与を行わない施設にはその理由、行っている施設にはその投与方法の内容について質問した。それぞれ206、198、397計794施設より回答があった(回答率88.5%)。

### 結 果

1. 予防的投与を行っていないと答えた公的病院、私的病院、診療所それぞれ33、43、202計278施設で、その理由として分娩を取り扱っていない68、学問的に未確立98、副作用が問題18、適

応により投与62施設であり、適応症として次の疾患が挙げられていた。

鉗子分娩、吸引分娩、帝王切開、骨盤位、遷延分娩、前期破水、弛緩出血、母体抗痙攣剤服用、胎児仮死、頭血腫、低出生体重児、未熟児、新生児メレナ、新生児黄疸。

2. へパプラスチンテストを全例に実施のうえ、必要な症例に投与していると回答したのは、公的病院、私的病院、診療所それぞれ19、5、11計35施設であった。検査実施の時期は生後4～5日が多く、必要により再検査、再々検査を実施しているところも見られた。

3. 原則として全例に予防的投与を実施しているのは、公的病院、私的病院、診療所それぞれ154、150、245計549施設で、その内容は表1の

\* 社団法人 日本母性保護医協会

ようであった。

すなわち母体みの投与は14例で、分娩前または産褥初期にビタミンK剤の内服を行っている。母体投与と新生児との併用は13例あり、この場合新生児にはシロップの投与が一般的である。新生児みの投与は522例で、大部分がケイツーシロップによる。

4. ケイツーシロップを投与する場合、初回の投与を希釈を行うか否かの質問に対しては、希釈しないものそれぞれの施設で43, 43, 60, 希釈するものそれぞれ100, 95, 154で、計146(29.5%)は希釈せず349(70.5%)は希釈すると答えた。

5. 予防的投与を行う医師は、産科医、小児科医、産科医と小児科医のいずれかの質問にたいしては、公的病院それぞれ42, 48, 64, 私的病院89, 30, 31, 診療所232, 4, 9で施設間の相違が著しく、計363(66.1%), 82(14.9%), 104(18.9%)であった。

6. 原則として全例に投与を行っていると考えた施設において、ヘパプラスチンテストを投与の参考にしていないか否かの質問に対して、公的病院はしていない、しているそれぞれ118(76.6%), 36(23.4%), 私的病院127(84.7%), 23(15.3%), 診療所235(95.5%), 10(4.1%)でやはり施設間に差異が見られた。その合計は、参考にしていない施設480(87.4%), している施設69(12.6%)であった。

なおヘパプラスチンテストを参考にしていない施設では、その実施の時期は、生後4～9日15施設、14日1施設、21日2施設、1か月27施設、3～7日と1か月の2回18施設、母乳児のみ1か月6施設であった。

7. 新生児に対するビタミンK投与の回数は、表2のようであり、各施設の合計は、1回投与122(22.8%), 2回投与241(45.0%), 3回投与172(32.1%)であるが、ヘパプラスチンテストを参考にしていない施設では、これに追加投与することがあると考えられる。

#### 考 察

ケイツーシロップが発売されたさい、高渗透圧などの問題で、新生児に対する投与は、薬剤の希釈、投与の時期、量など、主治医の裁量に任されてきた。今回の調査で分娩を取り扱う約3/4の施設が、予防的投与に積極的な姿勢を示していることが分かった。ビタミンKの新生児への投与は、新生児メレナの予防にも効果があるといわれており、それも普及にあずかっているものと思われる。今後なるべく早い時期に、一定の基準が設けられ、それに沿って全国的に実施されることが望ましいと思われる。

#### 文 献

- 1) 日母医報, 昭和60年10月号, p 3.
- 2) 同, 同年12月号, p 6.
- 3) 同, 同 61年1月号, p 4.

表1. 母子へのビタミンK投与の状況

施設の種類の	公的病院	私的病院	診療所	合計
分娩を取り扱う施設数	204	193	397	794
投与を行わない	31(15.2%)	38(19.7%)	141(35.5%)	210(26.4%)
ヘパラスチンテストの 価により投与	19(9.3%)	5(2.6%)	11(2.8%)	35(4.4%)
原則として全例投与	154(75.5%)	150(77.7%)	245(61.7%)	549(69.1%)
母体のみ	1	1	12	14
母体+新生児	2	3	8	13
新生児のみ	151	146	225	522
新生児への投与法				
注射	2	1	7	10
注射+シロップ	3	4	6	13
VK顆粒(散)	1	5	1	7
VK顆粒(散) +シロップ	0	2	0	2
シロップ	147	135	219	503

注. %は施設別に対する率を表す。

表2. 新生児に対するビタミンKの投与回数

施設の種類の	公的病院	私的病院	診療所	合計
1回投与法	31(20.3%)	33(22.1%)	58(24.9%)	122(22.8%)
2回投与法	70(45.8%)	61(40.9%)	110(47.2%)	241(45.0%)
3回投与法	52(34.0%)	55(36.9%)	65(27.9%)	172(32.1%)

注. 1) %は各施設別に対する率を表す。

2) ヘパラスチンテストを実施している施設は、必要に応じ投与を追加。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



### 要約

新生児・乳児ビタミン K 欠乏性出血症の予防のための、妊産婦または新生児・乳児に対するビタミン K の予防的投与の実態を知るために、日本母性保護医協会の定点モニターシステムを利用して、昭和 62 年 12 月アンケートによる調査を行った。分娩を取り扱う公的病院、私的病院、診療所、それぞれ 204, 193, 397 計 794 施設のうち、予防的投与を行わない施設それぞれ 31, 38, 141 計 210 施設(26.4%)、ヘパラスチンテスト実施の結果により投与を行っている施設それぞれ 19, 5, 11 計 35 施設(4.4%)、原則として前例に投与を行っている施設それぞれ 154, 150, 245 計 549 施設(69.1%)で、全体の 584 施設(73.6%)が投与に積極的姿勢を示していた。